

講演会・資料で語る北海道の歴史 講演録

「北海道の出版文化史 ～昭和時代を中心にして～」

講師：出村 文理 氏

## はじめに

北方資料室では、所蔵する資料を題材に、北海道の歴史を学ぶ講演会を開催しています。

平成 22 年 9 月、北海道史研究協議会の協力により、出版文化史に造詣が深い出村文理氏をお迎えして、本州の大手出版社が札幌に疎開していたエピソードや、戦後占領期の出版ブームなど、昭和時代を中心にした道内の出版秘話をテーマに取り上げた講演会を開催しました（「資料で語る北海道の歴史 第 6 回」）。今号はその講演録です。

北海道における本格的な出版文化は、明治期の開拓使事業や北海道庁の拓殖政策に基づく官庁出版物の刊行に始まり、これまでに北海道の歴史文化や自然に根ざした多彩な出版物が刊行されました。

官庁出版物の活発な刊行、並びに戦後占領期の北海道出版ブームを経て、昭和 40 年代には商業出版社の隆盛となって今日に至りますが、その変遷について詳細に紹介いただきました。

本講演録が、地域の資料や歴史に対する理解を深め、また、新たな興味を持っていただくきっかけとなれば幸いです。

当館より、講師の出村先生並びに北海道史研究協議会の皆様に、改めてお礼を申し上げます。

### ■ 講師プロフィール

昭和 13 年小樽市生まれ、北海学園大学卒業、北海道大学で文部事務官として勤務されました。

北海道史研究協議会、北海道文学館、北海道考古学会、小樽文学舎、知里真志保を語る会に所属されています。

### ■ 著書

#### 1 書誌編纂

- ・『知里真志保』(知里真志保書誌刊行会〔編〕 サッポロ堂書店 2003) ※共編
- ・『知里幸恵書誌』(知里森舎編・刊 2004) ※アイヌ文化振興・研究推進の出版助成、共編
- ・『ニール・ゴードン・マンロー博士書誌』(出村文理〔編〕 2007) ※アイヌ文化振興・研究推進の出版助成、私家版

#### 2 北海道・樺太の出版文化史関係

- ・「戦後占領期・札幌市の出版ブームについて」(『札幌の歴史 (第 30 号)』(新札幌市史編集室編 札幌市教育委員会文化資料室 1998) 収録
- ・「出版編集者・池田秀雄と鶴(ぐるす)文庫」(『さっぽろ市民文芸 (第 15 号)』(札幌市民芸術祭実行委員会 1998) 収録 ※平成 10 年度さっぽろ市民文芸奨励賞(評論)受賞
- ・「樺太(1905～1945)の出版事情」『サハリンを読む一遙か〔樺太〕の記憶』(北海道立文学館編・刊 2009) ほか多数

「資料で語る北海道の歴史 第6回」講演会

「北海道の出版文化史 ～昭和時代を中心にして～」

講師：出村 文理 氏

平成22年9月4日 於：北海道立図書館研修室

## 1 はじめに（自己紹介・北海道出版物調査のきっかけ）

### (1) 自己紹介

ご紹介いただきました出村でございます。お暑い中、お集まりいただきましてありがとうございます。パワーポイントを使用して紙芝居風に話を進めますので、お気軽にお聞き願いたいと思います。

私は、出村<sup>ふみただ</sup>文理と言いまして、親は文科系でも理科系でもできると思って付けたようですが、どちらも駄目でした。勤務の大学では、名前のとおり文学部と理系の学部、研究所で仕事をしました。

小樽生まれですが昭和15年に中国に行きまして、中国の南京付近で育ち、戦後は札幌に住んでおります。昭和33年から平成11年まで北大の事務職員として勤務しております。いろいろな学部をまわっております。函館にある水産学部にも勤務し、船舶や魚類などについて、いろいろなことを勉強させていただきました。

趣味としまして、昔、土曜日が半日勤務のため、午後から北大近辺の古本屋を歩くのが常でした。そうしましたところ、戦後の札幌で出版された川端康成の小説を見つけてから、なぜ札幌から出たのだらうというのが始まりで、札幌を含む戦後北海道で出版された本を集めており、現在これら約500冊を所蔵しています。戦後占領期の札幌から1,500冊出ていますから半分より少ないものを所蔵していることとなります。今年は文字・活字文化振興法の成立5年目で、国民読書年であり、関係行事が実施されています。

北海道立北方資料室開設40年ということで、まもなく読書週間が始まることでそれにふさわしい内容となるかわかりませんが、お話をさせていただきたいと思います。

### (2) 北海道内刊行出版物調査のきっかけ

北大付近の古書店で昭和21年に札幌青磁社刊行の川端康成の小説『浅草紅団』を最初に見つけました。価格は確か30円か50円でした。この本が、戦後札幌を含む北海道で出版の本を集めた「きっかけ」でした。

さらに私は北大を定年退職後は、文献目録作成に着手して、『知里真志保書誌』（共編）、『知里幸恵書誌』、また平取で亡くなったマンローの書誌を2007年に刊行しています。

話の順序として、北海道出版事情を述べますが、その前に宣伝になりますけれども、2年前に刊行の『北海道出版文化史』を紹介した後に北海道出版事情のうち、昭和時代

のところはみなさんにも関係のあるところですよ。昭和時代を詳しくして終えたいと思います。途中5分くらい休憩を設ける予定でございます。

## 2 北海道内刊行出版物の特徴（自然風土・歴史・明治以降の拓殖政策）

北海道は日本列島の最北端に位置し、いわゆる北方圏の一番南に属しています。気候を含む自然風土、動植物などが本州とは著しく異なり、気候区分では、亜寒帯としての寒冷地です。歴史文化では先住民族のアイヌの人々が居住し、文字を持たない民族ですが、ユーカラに代表される口承文芸を有していました。本州と比べて和人の歴史が浅く、松前藩が徳川幕府に認められて、和人が江差・松前・箱館（函館）を中心とする道南に居住して、漁業による沿岸部での就業以外は未開拓でありました。

北海道はご承知のとおり、明治政府により本格的に北海道開拓・拓地植民に着手され、東北を中心に全国から屯田兵・移民の形で移住してきた人々の集まりです。かつて、評論家の大宅壮一は北海道がアメリカ合衆国であると評しました。つまり全国の各県の人々が集まって構成され、アメリカが世界各国からの人々とアフリカからの黒人で構成されていることに類似していると指摘しました。北海道人の気質が大らか、明るい、ものにこだわらない良い面であり、一方、経済観念がないとか盛んに言われています。北海道の自然、開拓の歴史、北海道人という気質などが多くの北海道出版物に表されているのではないかと思います。

## 3 『北海道の出版文化史』（北海道出版企画センター 2008.11）の刊行

高倉新一郎・北大教授が執筆の『北海道出版小史』は昭和22年刊行の小冊子ですが、幕末から昭和20年までの北海道の出版文化が網羅的に書かれたものです。北海道出版文化に関する唯一の本で、名著です。

日本出版文化史関係書は多くの人々が書いていますが、内容は江戸や東京を中心としたものです。江戸時代には、江戸、京都、大阪、名古屋など、出版業が盛んでした。

現在の出版業は東京を除くと北海道、沖縄、長野県が非常に盛んなところですよ。沖縄には、昨年、行ってきましたが、出版社が30軒くらいあります。2/3くらいが沖縄の観光の本です。残りの10社は琉球文化関係であり、琉球の踊り、方言、民話関係などの出版物を刊行しています。沖縄は本州と自然風土・歴史文化が異なるため、出版活動が北海道と同じくらい盛んですよ。

一昨年、『北海道の出版文化史』が刊行されました。高倉先生の本の後を検証したものです。版元の北海道出版企画センターの創業者への追悼の企画です。私も編集委員の一員として参加し、60回近くの打ち合わせを行い、執筆テーマと執筆者選定を行いました。

さらに、執筆者が決まってからは研究会を6回行って、予定どおり1年半後に出版されました。この本は762ページで執筆者23名。非常に新聞、雑誌から好意的な評が寄せ

られましたが、内容的には北海道の自然とか動植物が非常に弱いこと、音楽関係書が掲載されなかったことなどの問い合わせもございました。

お手元の資料の目次をご覧ください。この本は通論、各論、資料から構成されています。お勧めしたいのは、田端宏先生の〈北海道の出版事情〉です。これは今日のお話のエッセンスであり、全てを網羅しております。

特に注目すべきは、札幌の古書店・弘南堂店主の高木庄司氏と北海道出版企画センター創業者・野沢信義氏による〈対談北海道書誌学入門〉対談です。北海道出版界を概観しています。目次の〈北海道に於ける出版業の調査〉は、北海道拓殖銀行調査部の古田謙二氏が当時の北海道の出版界を分析したものです。結論を言いますと出版というのは非常に水ものであって、あまり金を貸してはいけないとの内容の報告書です。

## 4 各時代・各時期の出版物

### (1) 配布資料・年表

北海道の出版史を大別して幕末、明治・大正中期くらいまで、大正中期・昭和10年代から終戦までの昭和・戦前期、終戦後は占領期から昭和63年までとなります。

配布の年表をご覧ください。日本の出版物は、そのほとんどが幕府と各藩並びに政府によって規制されていたことです。江戸時代は幕府と各藩にとって都合が悪い場合あるいは風俗上のものを出版差し止め、明治政府は出版条例、新聞条例、出版法、新聞法等の政府による法規制です。大正時代からは治安維持法によって内務省が徹底的な検閲を実施しています。メディア検閲は、太平洋戦争直前になるとさらに厳しくなっています。

次に裏を見てください。占領軍は日本政府による出版・言論統制を解除して、出版・言論の自由化を行いました。占領軍は、新聞・放送・ラジオ・出版の全てのメディア検閲を昭和20年9月から24年11月まで実施しました。検閲については後程詳しく説明いたします。日本が独立した昭和27年以降は基本的には言論出版の自由となっています。現在は新聞社・大手の雑誌出版社が自己規制をしているはずですが。

### (2) 幕末（北海道での出版の芽生え）

蝦夷地＝北海道には松前藩が置かれ、一時期幕府直轄となったことがあります。松前藩による場所請負制度の実施、すなわち北海道沿岸に漁業権を設定して、商人に請負わせる制度です。アイヌの使役、収奪などが生じています。と同時に、北前船でいろいろな物資が移入されて関西・北陸の文化が入ってきました。

江戸時代後期の本州では出版業が興り、全国の門前町や江戸・名古屋、京都、大坂が盛んでした。

江戸時代の書籍は全て和綴じのもので、木版刷です。従って、今のような印刷形態ではございません。出版元・執筆者・版木を彫る職人・版木を刷る人の形で出版されました。北海道における出版関係で言いますと、蝦夷地関係地図類が盛んに売られました。

探検もの、紀行、有名な松浦武四郎の本が盛んに出ました。

幕末にはどんな本が出たか具体的に申します。これが北海道で古い出版物です。幕府は有珠、様似・厚岸にお寺を建立して、アイヌの人々への布教を行いました。有珠善光寺では文化元年（1805）年刊行の『蝦夷地大白山〔おおぐすやま〕善光寺縁起』というお経の一つです。アイヌ語訳のカタカナも付いております。現在も版木が残っており、北海道文化財に指定されています。昭和40年までそれを刷って販売したと聞いています。

これは函館市中央図書館所蔵の古活字本で、松前藩の藩校・徽典館での教科書として使用された『白文孝経』です。幕末にロシアの領事館が函館に開設されたため、ロシア語入門書も刊行されています。結論を申しますと、これらは北海道で出版したものではなくて、その多くが本州で木版刷したもので、北海道の出版に影響があるかと言うと、直接結びつかないのではないかと思います。

しかしながら、松浦武四郎の著作と作成地図類は、北海道開拓使でも使用されました。武四郎の原本・地図類の多くが函館市中央図書館や道立図書館と北大図書館に所蔵保管されております。これらは北海道の出版文化の先駆けと言って差し支えないと思います。

### (3) 明治・大正中期（開拓使・北海道庁による官庁出版物、新聞・雑誌の刊行）

明治政府は北海道の拓地植民実施機関の開拓使を設けました。明治2年設置の開拓使はロシアとの国防の問題、本州の士族・農民の救済のため、拓地殖民政策を中央集権で行いました。産業振興のための欧米技術の導入、あるいは技術者要請のため札幌農学校設立を行う共に、関係出版物を刊行しています。

明治15年以降は北海道庁が計画的開拓政策、本州から資本導入で北海道開拓を進めて、そのための関係出版物を刊行しました。明治20年代までは人口が少なく、新聞を除き民間人による出版物は極めてわずかでした。

大正初期までは開拓使・北海道庁による出版物、つまり官庁出版物が北海道の出版物の主流でした。開拓使・北海道庁は官庁出版物として、①移民・殖民への周知関係、②産業振興関係、③調査・研究関係、④行政遂行関係に区分され、北海道開拓遂行のための宣伝・啓蒙、技術指導するような本、あるいは当然実務遂行の規則とか、統計表、開拓使は約203点の本を出版しています。北海道庁の出版物は、数え切れない位、刊行されています。さらに道庁の外郭団体というのが沢山ありまして、いろいろな本が出ました。

それでは、開拓使・北海道庁ではどのような出版物を刊行したのか、映像をご覧ください。これはお雇い外国人、アメリカのライマンが作った地質図で、開拓使が作らせたものです。これは札幌農学校のクラーク教頭がまとめたものです。これは英語では、「Annual Report of Sapporo Agriculture School」というもので、その英訳です。アメリカの大学は毎年、年次報告書を刊行しています。クラーク先生の言葉として有名な *Boys be ambitious* が有名です。北大は、*Boys be ambitious like this old man*（この老人のごとく野心を持っている）と述べたであろうと捉えています。

北海道庁は 移住民の受入担当部署の殖民課を設置して、その受入のための『北海道移住問答』を刊行、民間の技術指導としては林頭三『馬鈴薯』が留萌から刊行されています。北海道庁は、拓殖関係の雑誌『殖民公報』を創刊、長く刊行されています。約 20 年位前に復刻されました。また道内の主な市町では、港湾・道路の土木工事関係の記念誌、多くの移住民受入案内書である市町村便覧を刊行しています。

北海道で最初の民間新聞は明治 12 年の『函館新聞』です。一定の人口が集まると移動、交流、物流が活発になり、当然そこに情報というものが必要不可欠となって新聞が発行されるようになります。開拓が全道に及ぶと、地域の情報源として各地方や市町に多くの新聞が創刊されましたが、その多くは統廃合と休刊を繰り返しています。全道紙の『小樽新聞』と『北海タイムス』が明治中期に創刊、両紙は統合合併の昭和 16 年までライバル関係で、各種出版物を刊行しました。北海道の古くからの大手印刷会社の創立者は新聞社の勤務者、或いは新聞社の下請け会社であることが多く、札幌市の山藤印刷・中西写真印刷が該当します。

当時、北海道で最初の雑誌刊行は明治 24 年の『北海道工業雑誌』です。この雑誌や『北海の商業』などの多くの雑誌が刊行されましたが、現存しているものが少なく、多くのものが 1-2 年の刊行期間であったと思います。明治末期になると、数年前に閉店した札幌の富貴堂、函館の小島大盛堂などの新刊書店が北海道関係書を刊行・発売しています。大正中期から昭和の初期にかけて、北海道でようやく本格的な民間出版社が出来ました。

#### (4) 大正中期～昭和戦前期

大正 7 年に開道 50 周年を迎えました。道民の人口が約 240 万を数え、現在の市町村の形成、民間企業による産業整備・鐵道路線などが進みました。幾つかの課題を抱えながらも北海道の開拓は進展しました。北海道移民の二世つまり北海道生まれの 2 代目・道産子時代となりました。

大正中期からいわゆる大正デモクラシーが興り、全国的に文芸、美術、音楽の諸活動の活発化と共に東京を中心とした商業出版が盛んになり、雑誌『キング』・『少年倶楽部』・『婦人倶楽部』などの雑誌を創刊されました。娯楽映画・ラジオ放送などのメディア関係も発達しました。

北海道におきましても民間の雑誌類が刊行され、これは『職婦』という婦人向け雑誌です。これは 1 号、2 号が北海道立文学館にあります。健康雑誌が旭川では昭和 2 年に創刊されています。女性誌の『北海の女性』も刊行、後の道会議員・水島ヒサも執筆しています。子供向の雑誌が出ています。

大正末期から昭和初期にかけて本格的な民間出版社が誕生しました。大正 14 年に石附忠平が代表の北海教育評論社と大正 15 年に石田磊助が創立した北海出版社の二社です。北海教育評論社は教員向雑誌『北海教育評論』を、北海出版社は義務教育副読本、青年学校の教科書をそれぞれ刊行しました。昭和 8 年には湯浅英五郎が農業教育関係書や農業技術書刊行の淳文書院を設立しました。これら三社の代表は札幌師範学校＝現在の北

海道教育大学・出身で、小学校教員を経験された方です。読者・講読の対象を生徒と教員とし、三社とも活発な出版活動を行いました。戦後の昭和28年まで札幌に古書店の尚古堂がありました。古書販売の他に、北海道の郷土に根差した雑誌『蝦夷往来』全14冊を刊行、北海道の考古学・歴史・民俗などの郷土文化を主題とするものを掲載しました。北海道出版企画センターから復刻されている北海道を代表する雑誌と云えます。

小樽新聞社は昭和13年に系列会社・北方文化出版社を札幌に設立、多数の農業関係書や小樽新聞の販売促進雑誌『オールトピックス』を刊行しています。

## (5) 昭和戦中期

### ア 戦中期の出版物

札幌市の北海教育評論社・北海出版社・淳文書院・尚古堂及び北方文化出版社は、それぞれ北海道の教育・歴史・農業関係の出版物を刊行して、北海道の商業出版が本格化しようとしていました。昭和13年に国家総動員法が施行、国民生活の全てが戦時体制となり、新聞・出版・映画・音楽などのメディアや文化事業に、政府により規制・統制が実施されました。すなわち、①新聞は全国の新聞社を統廃合して一県一紙制度、②出版は印刷用紙の配給制と出版の許可制、③映画はフィルム配給制と出版の許可制などが実施されました。また複数の通信社も國策会社の同盟通信社に一本化され、すべてに政府による検閲が強化されました。

こうした背景の中でも北海道らしい出版物が刊行され、その後の北海道の文化に影響を与えました。古書店尚古堂は北方出版社を設立、昭和16・17年の2年間で河野廣道『北方文化の主潮』、高倉新一郎『北海道文化史序説』、更科源蔵『コタン生物記』〈北方叢書〉3冊を刊行しました。また北海道の散文・小説・評論等の総合的文藝雑誌『北方文芸』が昭和16年に創刊されました。この雑誌は北海道文学の魁けであり、戦後の月刊雑誌『北方文芸』とは直接関係がありません。

小樽新聞社系列の雑誌『オールトピックス』は昭和13年に小樽新聞販売拡張誌として創刊、太平洋戦争開始後は『新青年』に誌名変更、小樽新聞社が北海タイムス社等と合併した後は、読売新聞社に発行権を譲り、戦後刊行の『週刊読売』（現在は廃刊）となりました。

### イ 印刷用紙の配給制（・日本出版文化協会設立）・出版物の流通機構（日本出版配給（株））

当時の政府は印刷用紙の配給制と出版物の流通機構を一元化して、出版物の国家統制を行いました。印刷用紙類は昭和15年から同25年まで統制制度を採用、配給制を実施。國策として全国の出版社・団体が強制加入の日本出版文化協会（後に日本出版会）を設立して印刷用紙の配給権限を同協会に付与しました。出版物を刊行するには同協会に申請許可を要するようになりました。ちなみに当時、樺太で生産の紙類（印刷用紙・新聞用紙）の生産が日本全体で45%の生産量でした。また商業出版物は民間の流通会社を通じて全国で販売されていましたが、政府は國策会社の日本出版配給会社を設立し、同会社を経由しないと販売不可能としました。昭和15年、内閣に内閣情報局を設け、ニュー



ス類の管理統制を行いました。印刷用紙の配給は昭和19年に更に厳しくなりました。政府による言論・出版統制並びに印刷用紙配給制により、北海道内の新聞社と出版社においても新聞の統廃合・出版社の統廃合に及びました。

#### ウ 全国新聞社の統廃合と『北海道新聞』の誕生

全国の新新聞社は、新聞事業令による一県一紙実施のため、朝日・読売・東京日々（現・毎日）を除く統廃合となりました。北海道では、全道紙の小樽新聞・北海タイムスを含む11紙が昭和17年11月に統合合併となって「北海道新聞」が出来ました。道民の新聞購読は「北海道新聞」のみとなりました。

#### エ 道内出版社の統合合併（北方出版社の誕生）及び道内雑誌刊行の統廃合

太平洋戦争開始前後から全国の出版社の統合合併が日本出版会により進められ、さらに全国の雑誌、同人雑誌も統廃合されました。北海道では、北海出版社・北海教育評論社・淳文書院及び北方文化出版社が昭和19年9月に統廃合し、北方出版社となりました。代表者は北方文化出版社の地崎宇三郎、専務に北海教育評論社・石附忠平がそれぞれ就任となりました。北方出版社は戦後占領期の北海道出版ブーム時に大活躍をします。

戦中期の北海道で刊行の雑誌も統廃合が行われ、文芸雑誌『北方文藝』も他の短歌雑誌・俳句雑誌と統合され、当時の大日本翼賛会北海道支部編集の『北方圏』の一誌となりました。この雑誌は第1号のみの刊行となり、内容的に乏しいものです。この他の雑誌として戦時体制に必要な『健民』、『北農』、『北海道医学雑誌』、『北海道薬報』及び『北海道鉱山学雑誌』の四誌のみの刊行が認められましたが、終戦時の昭和20年には印刷用紙が逼迫して刊行遅延・休刊となりました。『健民』は結核対策関係の健康雑誌、『北農』は農業技術関係、『北海道医学雑誌』は北大医学部紀要、『北海道薬報』は薬草栽培関係、『北海道鉱山学雑誌』は石炭技術関係のものです。

#### オ 講談社の北海道進出

昭和19年から20年8月まで、米軍機は本州の主要都市に空爆を行い、20年3月の空襲で東京は焦土となってしまいました。在京出版社・印刷工場も機能を停止状態となりました。出版統制団体・日本出版会は、在京出版社を全国各地に疎開計画を立案しています。講談社（当時・大日本雄弁会講談社）は昭和20年5月に自ら札幌市に富貴堂書店に支店を設置、出版活動を行いました。また、印紙・葉書、切手類も東京で印刷困難で、空襲の少ない札幌の印刷会社で印刷を開始しました。講談社の支店設置により、札幌に印刷用紙の配給権限を有する日本出版会北海道支部が設けられました。

講談社は、兵士に配布の軍隊用として＜<sup>じゅべい</sup>恤兵文庫＞の菊池寛の小説『愛憎の書』上巻を終戦間際に刊行しました。表紙に陸軍の星のマークが附されています。講談社は戦中期にはこの一冊のみの刊行でしたが、北海道出版ブームは多くの書籍を刊行しています。

#### 【休憩】

配布資料＜名著・労作の周辺＞

ここで今回のお話とは直接関係はありませんが、お手元の資料は『北海道新聞』掲載の<名著・労作の周辺>一覧です。ご参考になれば幸いです。原田康子の小説『挽歌』です。約 200 万部のベストセラーです。下から 3 番目の三浦綾子の小説『氷点』もベストセラーとなりました。知里幸恵の『アイヌ神謡集』は岩波文庫で版を重ねています。

## (6) 昭和占領期

昭和 20 年 8 月 15 日、ポツダム宣言を受諾して終戦となりました。9 月上旬までに米軍が本州に進駐、北海道には 10 月 4 日に函館上陸、その翌日に小樽上陸、札幌に北海道地方司令部が置かれ、道内に兵士 27,000 名が進駐しました。札幌市内の旧拓殖銀行本店、札幌グランドホテル、現在の知事公館、北大、北星女学校などの建物が接收されました。当時はあらゆるものが窮乏してインフレ経済となって、極端な食糧不足状態となっていました。昭和 20 年 11 月から全国的な出版ブームとなって、翌年に北海道も出版ブームとなりました。長年の言論・出版統制で出版物・新聞類が自由に刊行出来なかったこと、容易に講読出来なかったことの反動で、国民の活字文化への希求が強まった時期でした。

### ア 北海道出版ブームとなった理由

全国出版の中心地東京が戦災により、作家等が全国に疎開、印刷などの出版機能が停止状態となり、加えて印刷用紙の極端な不足となりました。札幌・小樽を中心とした北海道は、出版関係のソフトとハードを有していました。すなわち、①北海道が印刷用紙・新聞用紙の主要生産地で関係工場が操業していたこと、②中小の印刷所が罹災なく、操業していたこと、③本州から多くの執筆者・画家が北海道に疎開していたことである。特に印刷用紙の主要生産地の南樺太を終戦で失い、北海道生産の印刷用紙が在京出版社から注目されました。

### イ 本州資本の出版社と地元資本の出版社

昭和 21 年春以降、在京の青磁社・鎌倉文庫（同文庫北海道支社代表者はが川端康成）・創元社・筑摩書房等の大手出版社が札幌に支社を設け、終戦時に支社設置の講談社と共に、活発な出版活動を開始しました。昭和 19 年に道内四社統合合併の北方出版社は雑誌・書籍の精力的な出版活動を開始、併せて古書店経営者参画をはじめ地元資本の多くの出版社が設立、道民を購買対象とした出版物を刊行しました。

### ウ 日本出版協会北海道支部加盟の出版社数

日本出版協会北海道支部は昭和 20 年 5 月に設置の日本出版会北海道支部を、同年 9 月に改組したもので、出版社・団体が使用の印刷用紙配給権を有していました。つまり同支部に加盟しないと印刷用紙が配給供給されなかったのです。昭和 22 年 5 月には、本州資本の出版社が 21 社、道内資本の出版社・団体が 87 社の約 108 が同支部に加盟していました。

### エ 書籍

一般に本州資本の出版社は東京で整版された紙型を北海道に運び、札幌の印刷所で印刷製本をしました。多数の文芸書・教養書が道内のみならず、本州方面で販売されました。

創元社…創元選書/ 筑摩書房…文芸書・教養書/ 鎌倉文庫…文芸書/ 日産書房…文芸書

なお、講談社・札幌講談社は本州で整版紙型のものの他に、北海道を主題とした書籍・子供向の書籍を刊行しています。

地元資本の出版社が、北方出版社が自然科学書を中心に刊行した以外、北海道を主題とした書籍や道民を対象とした娯楽書が刊行、当時の食糧不足を反映した各種の寒地農業関係書も刊行されました。

北方出版社…自然科学書・農業書/北日本社・北方書院…娯楽書・北海道史関係書/玄文社…教養書・北海道関係書/柏葉書院…農業書/友厚堂書房…娯楽小説/白都書房…文芸関係/川崎書店…文芸関係/北方民生協会…教育関係/鶴<sup>ぐるす</sup>文庫…趣味本

本州資本の出版社と地元資本の出版社からの書籍刊行数は、昭和 21 年から 5 年間で約 1,500 点と推定されます。どのような書籍が刊行されたか、映像で示します。

本州資本の出版社

創元社北海道支社…約 50 冊の創元叢書を札幌で発行、札幌で印刷の同叢書は本州方面でも発売。

文庫北海道支社…高見順作『今ひとたびの』、東京から紙型で、札幌で印刷。東京印刷版と札幌印刷版では表紙の繪に違いがあります。

青磁社…『歌集 鳥山』

筑摩書房…中村光夫『作家と作品』

地元資本の出版社

友厚堂書房…札幌の古書店経営の出版社、時代小説『大江戸地獄變』

玄文社…河野廣道『北海道自由國論』、<北海道独立論>を論じたもの。

鶴文庫（ぐるす）文庫…和紙を使用した木版画関係の趣味本、疎開中の川上澄生の木版画を使用したものを多く刊行。

### オ 各種雑誌類の刊行

道内刊行の市販雑誌は地元資本の出版社を中心に発行、一部を除き、その購買対象は道民でした。東京刊行の『週刊朝日』・『サンデー毎日』は一時期、札幌で印刷していました。これは印刷用紙不足のため、道民向けを印刷した処置でした。道内刊行の雑誌は約 100 種類に及び、人文・自然科学関係の学術誌・農業関係誌、娯楽誌・子供向雑誌等と多岐にわたりました。戦前・戦中期の政府による雑誌刊行規制が解除されたことによるものでしたが、その多くが短期間の発行のものばかりでした。

次の雑誌は当時、全国的に高い評価を得たものや販売好調なものでした。

『生物』（北方出版社・昭和天皇のご愛読の生物関係雑誌）、『北方風物』（北日本社・詩人の更科源蔵編集の随筆雑誌）

### カ 子供向けの出版物

北海道内で子供児童向の書籍・新聞雑誌・紙芝居類が最も多く刊行されたのは、占領期です。本州からの子供向け出版物が本州方面での印刷用紙不足と流通関係で北海道に販売されなかったため、道内在住の作家・画家と学校教員を煩わして、主に北海道を主

題とした子供向の出版物を刊行したのです。

その出版物は、①書籍（繪本・読み物・漫画）、②新聞・雑誌、③紙芝居・双六・カルタ類に区分されます。書籍関係は、約70社から約250点の繪本・読み物・漫画が刊行されました。読み物関係では、童話・お話の他に科学知識や北海道の自然・歴史関係のものが刊行、本州資本の講談社は本州で整版の紙型により世界の名作関係を刊行すると共に、北海道関係の多数の子供向書籍を刊行しました。札幌のエルム社は、童話作家塚本長藏と彫刻家・画家の梁川剛一のコンビで、多くの子供向けの読み物・繪本を刊行しました。漫画本は約50点が刊行され、その数はこれまでの北海道の最大数です。新聞雑誌は新聞が約20点近く、雑誌が約10点、それぞれ刊行されています。雑誌『北の子供』は5年間の長期に刊行され、全国誌『こども朝日』の北海道向は札幌市で印刷されました。紙芝居は、本日、ここに持参の紙芝居は、札幌で刊行された『世界名作紙芝居全集』の中の「ウイリアム・テル」です。塚本長藏と梁川剛一のコンビのもので、このシリーズは全6巻が刊行されています。当時の北海道での紙芝居刊行数は、東京・大阪に次いで全国第三位でした。

#### キ 日本出版協会北海道支部主催北海道出版文化祭

戦後占領期、特に昭和21・22年の北海道出版ブームは出版物の販売が好調で、刷れば刷るほど売れました。道内の各出版社に好景気をもたらしました。出版統制団体の日本出版協会北海道支部は、好景気を背景にして昭和22年5月末から6月6日まで、札幌で〈北海道出版文化祭〉という大イベントを実施しました。主な実施事業は、①記念講演会、②出版文化展、③文学者大会、④高倉新一郎著『北海道出版小史』と道内出版物目録『北海道出版総合目録』の刊行でした。記念講演会には本州から川端康成・久米正雄・柳田國男・長谷川如是閑・小林秀雄・亀井勝一郎・中村光夫・河上轍三郎などの文化人・作家を招へいしました。その支度金は一人5千円との記録があります。現在、貨幣価値でいえば300万円位に相当します。そのほかに講演料も支払っています。いかに当時の出版社が儲かったかを示しています。この行事は当時の北海道出版ブームを象徴するイベントであり、関係行事は多くの人々が来場して成功裏に終了しました。

#### ク 占領軍によるメディア検閲

占領軍は日本の明治政府以来のメディア関係のすべて法令の廃止を行い、新聞・通信・出版物・映画などの今までの法令を全部撤廃します。と同時に占領軍は日本の軍国主義阻止・占領軍の円滑な管理のためと称して、新聞・出版物・ラジオ放送・映画演劇などのメディア関係・郵便物の検閲を、昭和20年9月から4年間にわたり実施しました。実施機関は連合国軍最高司令部（英語名略=GHQ）（当時は通称・マッカーサー総司令部官と呼称）参謀第二部所属の諜報保安検閲であった民間検閲隊（Civil Censorship Detachment）CCDでした。CCDは全国を4地区に区分、北海道は東京・静岡県を含む関東甲信越・東北・北海道を担当する第1地区に属し、当初は北海道の出版物を東京に郵送していましたが、21年5月からは札幌に分局を設置し、北海道での新聞、出版物、ラジ

オ放送、郵便物及び電信電話の検閲を行いました。検閲は日本国民に秘密裏に、かつ徹底的に実施しました。検閲方法には事前検閲（例ラジオ放送）と事後検閲（例雑誌類）の二通りがあり、ラジオ放送は中島公園内にあった NHK 札幌中央放送局で、新聞は北海道新聞社内、出版物は札幌グランドホテル等でそれぞれ行われました。

出版物・新聞で〈大東亜戦争〉、〈八紘一宇〉の語の使用は削除訂正を、××○○などの伏せ字は修正を、文章表現中の占領軍批判は削除を命じ、最悪の場合には発行停止となっていました。昭和 23 年 10 月には北海道地区が第 4 地区となりました。北海道における検閲関係として、①労働組合が編集権を有した北海道新聞への徹底的検閲、②NHK 北見放送局での童謡「カモメの水兵さん」の放送禁止、③短歌雑誌『原始林』掲載の米軍兵士を詠った短歌を占領軍批判として指摘例、④雑誌『教育建設』掲載の〈神国日本〉2 頁分の削除例、⑤論文執筆者が札幌グランドホテル内の CCD に呼び出しを受け、英語堪能で米国籍を有する夫人を同伴して弁明した事例を挙げることができます。

#### ケ 北海道立図書館代田文庫と米国プランゲ文庫（戦後占領期出版物の保存）

占領期北海道の出版物は、次の 2 箇所保存されています。

##### ＜北海道立図書館代田文庫＞

この文庫は、日本出版協会北海道支部に各出版社から寄贈された北海道内刊行出版物（約 500 冊の書籍と雑誌類）を、同支部解散後に同支部事務局長であった代田茂（古書店尚古堂書店経営の北方書院代表）が昭和 28 年に北海道立図書館に寄贈したものです。占領期北海道内刊行の出版物に関する研究調査に寄与しています。

##### ＜米国メリーランド大学プランゲ文庫＞

プランゲ文庫は、占領期に GHQ・民間検閲隊（CCD）の検閲対象の新聞・出版物を、GHQ 高官のプランゲ博士が米国メリーランド大学に寄贈したものです。

当時、戦後の行財政混乱により公共図書館等の公的機関は、占領期の出版物の収集が困難であり、その多くが公共図書館等に所蔵されておらず、また国立国会図書館は設置直後でした。同文庫の資料類は当時、北海道内刊行のものを含む全国の出版物研究調査のみならず、占領期の人文・社会科学研究に寄与する資料となっています。同文庫の関係目録類が刊行されており、北海道立図書館には同文庫所蔵の北海道関係新聞・雑誌マイクロフィルムが所蔵されています。

#### コ 印刷用紙・印刷所

印刷用紙は昭和 15 年から政府の統制物資に指定、配給制が布かれ、戦災による製紙工場の焼失、印刷・新聞用紙の主要生産地であった樺太を失い、印刷用紙の絶対量が極めて不足していました。全国と北海道における出版ブーム下において、不足度が加速しており、旧陸軍用の印刷用紙や占領軍用の隠匿の印刷用紙の闇取引が行われていたようです。当時、生産の印刷用紙は仙花紙などの粗悪なものでしたが、北海道生産のものは本州産より全般的に上質でした。印刷用紙に纏わる話として、道内の A 印刷会社は、所有の印刷用紙を B 印刷会社に転売し、その利益で A 印刷の従業員の給与を支払ったとのこ

とです。新聞・印刷用紙の配給制は、昭和 26 年に解除になり、自由化となりました。北海道出版ブーム時の札幌の印刷会社はフル稼働で操業していましたが、当時の電力不足等のため、需要に応じきれず、苫小牧や倶知安の印刷会社でも出版物の印刷を行いました。また札幌の印刷会社の多色刷技術は、本州資本の出版社関係者や画家から指導を得て、その技術力が向上しました。

#### サ 北海道出版ブームの終焉

昭和 22 年度にピークであった北海道出版ブームは、出版の中心地・東京での出版事情の回復、及び印刷用紙の入手が容易となって、北海道進出の大手出版社が北海道から撤退し、東京本社に引き揚げていきました。昭和 24 年になると、全国的に出版物の販売が衰えて出版不況となりました。地元資本の出版社は数社を除き出版業から撤退していきました。昭和 25 年には全国と北海道の各出版ブームが終焉しました。

#### (7) 昭和 30 年代

占領軍は明治以来の法令と諸制度の撤廃・改訂を日本政府に命じ、新憲法制定並びにあらゆる制度が変わりました。教育基本法制定による新制学校教育制度の実施、社会教育法、図書館法等の制定となって、各市町村等に教育委員会と公共図書館が設置されました。昭和 27 年のサンフランシスコ講和条約により、日本は独立国となりました。その前後から、北海道では、北海道開発計画の推進のための北海道開発庁が置かれると共に、北海道初の民間ラジオ放送（HBC）開始、民間航空路開設及び私立大学新設等となって、道民の生活も次第に変化していきました。

昭和 26 年以降、北海道内の出版社は 8 社のみで、北海道の商業出版活動は停滞しました。その一方、昭和 26 年の新聞用紙・印刷用紙の統制物資解除＝配給制の解除自由化に伴い、道内の官公庁・市町村・大学では関係出版物の刊行が再開されました。

#### ア 道内市町村史刊行と北海道郷土研究会の活躍

道内市町村の多くが当該市町村の便覧・要覧を刊行すると共に、開基〇〇年・開村××年を迎える関係市町村ではその記念行事が企画され、その一つに関係市町村史刊行計画が策定されるようになりました。市町村史担当職員は、編集方法と掲載資料探索のために、北大関係者と北大図書館並びに北海道立図書館（当時札幌市に所在）と同館内にあった北海道郷土研究会を訪れることが多かった。北海道郷土研究会は昭和 24 年秋に設立の北海道の歴史文化研究の全道組織であり、河野廣道・更科源蔵・高倉新一郎・知里真志保・渡辺茂等の著名な研究者・文化人が同会の主要メンバーでした。これらの人たちは、市町村担当者からの照会・相談に応じて指導助言並びに関係市町村史の編集者・執筆者となりました。この時期の道内市町村史は同研究会の人々との関係で刊行されたものが大きく占めています。道内市町村史刊行はこの時期から約 20 年にわたり活発化し、市町村出版ブームといえます。

#### イ 検書房設立と北海道関係書刊行

戦中期の 4 出版社統合合併の北方出版社から、同 22 年に 4 社の一つであった北海教育

評論社（代表・石附忠平）が分離独立しました。同評論社は、月刊雑誌『北海教育評論』と小中学のワークブックや『北海道読本』を刊行していました。市町村史刊行から北海道の歴史文化（当時は郷土史と称していた）への関心が強まり、同評論社は北海道関係書を刊行するため、昭和29年に系列会社・楡書房を設立しました。同書房刊行書籍の主な執筆者は、北海道郷土研究会の主要メンバーであり、次の書籍が刊行されました。

高倉新一郎『北海道小史』、更科源蔵『北海道伝説集（アイヌ編）』、河野広道『北方昆虫記』、知里真志保『アイヌ語入門』及び『地名アイヌ語小辞典』、渡辺茂『北海道伝説集』和人編・〈北方文化写真シリーズ〉全6冊（更科『熊祭』・河野『アイヌの生活』、『アイヌの踊り』他。

昭和31年刊行の知里真志保『アイヌ語入門』は、アイヌ語・アイヌ文化関係書として、高い評価を得ており、北海道出版企画センターから復刻されています。この書の刊行直後に、知里先生と更科・河野・高倉の三先生との間で確執が生じました。知里先生が同書の〈あとがき〉中で、三人のアイヌ語の誤りを学問的に徹底的な批判しました。三人はその訂正を楡書房と著者に記述削除と謝罪を申し入れました。著者がそれを受け入れず、同書に説明文を附して、そのまま刊行発売となりました。その後、知里と河野・高倉とは、完全な不仲となってしまいました。現在、このような事態であれば、出版差し止めの処置や裁判沙汰となっていると思います。恐らく、知里先生はアイヌ語に関するいわゆるデタラメが許せなかったものと河野・高倉先生への感情に基づいたものと思います。その後、同書房からの北海道の歴史文化関係書の刊行が急減しています。

## (8) 昭和40年代～昭和60年代

日本は高度成長期を迎えて全国各地に公共投資が行われ、北海道においても道路網の整備を中心とした国土開発が進む一方、国鉄支線廃止や石油へのエネルギー転換による炭鉱が閉山となりました。道内には過疎地帯が増加していきました。また昭和40年代から、開道100年を迎えるあたり、文学・歴史等の北海道文化を改めて照射しようとする動向が生じてきました。その動向に呼応するように、北海道史・アイヌ文化関係のみやま書房と北海道文学関係の北書房が札幌に誕生しました。この2社に次いで昭和50年代には、道内に出版社が誕生、北海道関係出版物（書籍・月刊誌・タウン誌）が刊行され、北海道における出版ブームでは、第二次北海道出版ブームを呈しました。

### ア みやま書房と北書房

みやま書房は昭和30年に児童書刊行のために設立、北海道史・アイヌ文化関係書を刊行するようになったのは、同38年に同書房経営を継承した古田敬三さんの時からです。同39年の高倉新一郎『北海道史の歴史』がその第1号であり、数多くの北海道史・アイヌ文化関係書を刊行し、北海道の歴史・文化の啓蒙等に寄与しました。

北書房は、同37年に北海教育評論社・楡書房勤務の入江好之さんが独立して設立した出版社です。入江さんご自身が詩人であったため、北海道出身の作家・詩人の作品集を刊行しました。北海道文学の振興発展に尽力されました。

## イ 昭和 41 年開催の北海道文学展・市販月刊文芸誌『北方文芸』・北海道文学館

昭和 41 年に道内の文学関係者は、昭和 41 年に＜北海道文学展＞を札幌と旭川で開催し、多くの来場者が入場しました。北海道文学に関心を持つ道民が増え、関係者は北海道文学館を設立して、関係資料の収集と関係展示会等を開催しました。平成に入り中島公園内に、北海道立文学館として独立の建物を有するに至っています。また道内文学関係者有志により市販月刊文芸雑誌『北方文芸』が昭和 43 年 1 月に創刊、文芸作品の掲載のみならず、北海道文化・アイヌ問題等の評論も掲載、約 30 年余にわたり刊行しました。明治以降、北海道での出版物数の最大の分野は、短歌・俳句・詩・川柳の散文関係です。

## エ 多数の道内出版社誕生・市販雑誌とタウン誌の創刊（第二次北海道出版ブーム）

昭和 50 年代になりますと、札幌を中心に多数の出版社が設立され、特色ある北海道関係書を刊行しています。学術書刊行の北海道大学図書刊行会（現北海道大学出版会・昭和 45 年）・主に北海道の歴史文化書刊行の北海道出版企画センター（同 46 年）・道内最大出版社の北海道新聞社出版局（同 48 年）・多彩な出版物刊行の北海タイムス社出版部（同 49 年・平成 10 年に業務停止）を含む約十数社です。道内主要都市の新刊書店では、道内出版社刊行の書籍・雑誌類を並べた＜北海道コーナー＞を設置するようになりました。

この時期に多くの各種の市販雑誌が創刊、雑誌刊行のみの出版社が誕生されています。代表的な月刊雑誌として、『クオリティ』（太陽同 42 年）、『財界さっぽろ』（財界さっぽろ同 39 年）、『月刊ダン』（北海道新聞社同 48 年、後に『道新 TODAY』に誌名変更）、『北方ジャーナル』（北方ジャーナル社同 47 年）などがあります。

また企業・商店街がスポンサーとなって、無料配布のタウン誌が道内でも盛んに刊行されています。『さっぽろ・まんてん』（札幌まんてん社）、『月刊さっぽろ』（財界さっぽろ）、『北の話』（札幌北の話社）、『紅』（江別岩田醸造）などが代表的なタウン誌でした。道内出版物の書評専門紙『読書北海道』（札幌北海道読書新聞社）と出版印刷情報誌『月刊アイワード』（札幌アイワード印刷、当初の紙名は『月刊ニュースきょうどう』）が刊行され、この二つは全国的にも希有なものでした。私は昭和 50 年代から平成初期までを第二次北海道出版ブームを呈していたと思います。

## オ 出版傾向の変化（グルメ・旅行レジャー・健康）

道民の生活は、食物の欧米化、住宅の寒地用技術向上、自動車社会及びメディア関係の充実（複数のテレビ局によるテレビ放送・各地域の FM ラジオ放送局・全国紙の朝日、毎日、読売の北海道現地印刷）により、大きく変化して、生活そのものをいわゆる楽しむ形・風潮となりました。さらに平成に入り、インターネットの普及による高度情報化社会となっています。北海道内の出版物にもその変化が表われ、従来からの郷土関係出版に加え、グルメ・温泉巡り・旅行レジャー関係の書籍・雑誌が刊行されるようになりました。出版傾向の変化と云えるもので、平成から特に顕著になっています。



## まとめ

これまでの話をまとめますと、北海道の本格的な出版活動は明治の開拓使、北海道庁による各刊行の出版物から始まります。戦後占領期の出版は群を抜いて、いろいろな出版物が出ております。昭和 60 年代からは道民の健康、レジャー、商業雑誌がいろいろと出ております。北海道の出版物は実務的で役立つものがよく売れると云われています（例北海道植物図鑑）。北海道内刊行の出版物では、アイヌ文化・山岳・動植物関係が本州の人々に読まれています。北海道の出版物は、当然全国と同じように各時代を反映しており、戦後占領期北海道では当時の食糧不足のための農業書が多数刊行されています。北海道内の出版物は、本州との違い、特に自然風土、歴史文化の違いのものを刊行してきました。多くの北海道の出版物は、また北海道の文化・自然風土とその知識を、記録、公表、保存していると言えるわけです。

道内の出版社は北海道新聞社を除き、いわゆる零細企業であり、個人経営又は小人数の組織です。北海道に於ける産業としてはその地位が低いのですが、各出版社は出版への熱意が高く、北海道文化の継承・保存の重要な役割を担い、出版関係者が北海道文化賞受賞となっています。北海道文化賞受賞は北海教育評論社代表石附忠平氏と北書房代表入江好之氏が受賞、北海道文化賞奨励賞は尚古堂書店代表代田茂氏、北海道出版企画センター代表野澤信義氏がそれぞれを受賞されております。平成になってからは北海道大学出版会刊行の『アイヌ絵を聴く』（谷本一之著）が毎日出版文化賞を、北海道出版企画センターは多年の北海道文化関係書出版に対し、東京の出版団体の梓会から出版文化賞を、それぞれ受賞されています。

最後に＜北方圏＞の映像について説明致します。北海道の自然環境・アイヌ文化関係書は一部ですが、英文訳されて各国で読まれています。高倉新一郎先生の名著『アイヌ政策史』（日本評論社昭和 17 年・同 47 年に三一書房から復刻）もその一部が英文訳されており、翻訳書に次のような北方圏の＜地図＞（翻訳舎作成）が掲載されています。この地図が示すように、北海道は北方圏の南端に位置しています。私たちは日本地図を東京中心の南北で見つけています。北海道の自然や歴史を考察する際には、この地図のような視点・観点が必要と思います。

## 終わりに

本日使用のパワーポイントの書籍・雑誌類の映像は、その多くを北海道出版企画センター・野澤緯三男氏撮影の『北海道の出版文化史』掲載のものを使用しました。

以上、早口で取り留めのない話でございましたが、北海道の出版がこんな形で推移してきたことを理解出来ましたら、幸いです。また『北海道の出版文化史』をお読みいただくと幸いです。大変取り留めのないお話を致しましたが、ご清聴に感謝申し上げます。

(配布資料)

資料で語る北海道の歴史「北海道の出版文化史―昭和時代を中心にして―」

出村文理 (2010年9月4日・北海道立図書館)

1. はじめに (自己紹介・北海道出版関係調査のきっかけ)
2. 『北海道の出版文化史―幕末から昭和まで』 (北海道出版企画センター刊・2008年11月)
3. 北海道内刊行出版物の特徴
  - (1) 自然風土 (気候＝亜寒帯＝寒冷地＝流氷、動植物)
  - (2) 歴史 (先住民族アイヌ・いわゆる和人の歴史が浅い)
  - (3) 明治以降の拓地殖民政策北海道内刊行の出版物 (上記 (1) ～ (3) を背景、郷土に根ざした出版物)
4. 各時代・各時期別の出版物 (紙芝居風に紹介)
  - (1) 幕末・・・出版の芽生え
  - (2) 明治・・・開拓使・北海道庁による官庁出版物時代 (本州との違い)  
(開拓政策＝拓地殖民の推進)
  - (3) 大正・・・北海道庁・各市町村による官庁出版物時代/大正デモクラシーの影響
  - (4) 昭和時代～現在
    - ① 昭和戦前期・戦中期 (1927～1945)  
教育関係・農業書・戦時体制による出版規制・出版統制  
道内の4出版社 (淳文書院・北海教育評論社・北海出版社・北方文化出版社) の統合
    - ② 占領期 (1946～1950)  
全国的出版ブームに伴う北海道出版ブーム・占領軍による検閲
    - ③ 昭和30年代・・・北海道郷土研究会・市町村史ブーム  
楡書房・みやま書房・北書房等
    - ④ 昭和40年代以降・・・北大図書刊行会 (= 現・北大出版会), 北海道出版企画センター、北海道新聞社・北海タイムス社等
    - ⑤ 平成以降以降・現在・・・道民の健康・生活・レジャー関係の書籍刊行が中心。
5. まとめ
  - (1) 北海道の本格的な出版は、明治期の開拓使及び北海道庁による官庁出版物刊行に始まり、占領期の札幌市を中心とした出版ブームを経て昭和40年代からの多彩な書籍・雑誌の時代となった。
  - (2) 昭和50年代からは、道民の健康・生活・レジャー等関係の書籍が刊行。
  - (3) 北海道内の出版物は一般に実務的な傾向のものが多い。またアイヌ文化関係書や北海道の山岳・動植物関係書は、全国でも読まれている。
  - (4) 北海道内刊行の出版物はその時代の様相・背景を著わしており、本州との相違点を明確している。
  - (5) 北海道の商業出版は道内の産業界に占める位置は低い、北海道の文化・自

然を記録し、公表して保存している。沖縄を含む各県の出版事例。

(6) 北海道内刊行の北海道を主題とする学術書特に自然科学・アイヌ文化関係書は、国際的な北方圏研究に寄与している。

<配布資料>

1. 資料で語る北海道の歴史「北海道の出版文化史―昭和時代を中心にして―」(パワーポイント映像資料)
2. 『北海道の出版文化史―幕末から昭和まで』掲載目次  
(北海道出版企画センター 2008年11月)
3. 「北海道出版文化史関係略年表」
4. (参考)『北海道新聞』(朝刊)連載<名著・労作の周辺>内容一覧  
(1972(昭和47)年11月～1973(昭和47)年12月連載)  
(以上)

(資料1) 北海道出版文化史及び北海道内メディア関係年表

(出典・『北海道の出版文化史』2008)

	検閲関係	西暦	出版物・メディア関係	日本・世界の動き
江戸時代	市販出版物、幕府・各藩での出版差止め処置	1806 (文化3)	<木版刷時代> 有珠善光寺「蝦夷地大白山善光寺縁起」  蝦夷関係地図類の刊行 松浦武四郎による蝦夷関係地図類・紀行文の出版	1853ペリー来航 1854箱館開港
明治時代	出版条例・新聞条例・出版法・版權法・新聞紙法	1878 (明治12)  1893 1901	<開拓使・北海道庁の官庁出版物の刊行> <木版刷から石版印刷・活版印刷へ移行> 北海道最初の民間新聞『函館新聞』創刊 <函館・小樽・札幌等での新聞・雑誌類の刊行><道内各地に印刷所設置>  『小樽新聞』創刊 『北海タイムス』創刊	1869開拓使設置 1876札幌農学校 1882三県一局1886 北海道庁 1904日露戦争1905 樺太領有
大正時代	治安維持法(1924)	1918 (大正7)	<北海道庁・道内町村の官庁出版物の刊行> <活版印刷時代> <函館・小樽・札幌・旭川等での雑誌類の刊行が盛ん> 『北海道史』 <義務教育の副読本類の刊行> <商業出版社の設立>(北海出版社・北海教育評論社等)	1914第一次世界大戦
昭和	内務省警保局による検閲強化	1928 (昭和3) 1931 1932 1937	札幌中央放送局開局(順次に旭川・函館・釧路・帯広・室蘭の支局設置)  雑誌『蝦夷往来』(札幌・尚古堂書店) 『北海道郷土読本』類が刊行 『新撰北海道史』 淳文書院・北方農業社=北方文化出版社・北方出版社=尚古堂書店経営が設立	1938国家総動員法
昭和時代	戦時体制強化による出版・新聞統制	1940 1941 1942 1942	新聞用紙・印刷用紙の統制物資指定(配給) 雑誌『北方文芸』創刊 <国家による出版統制>(日本出版文化協会による出版許認可制。 「新聞事業令」(一県一紙制度)による道内新聞社1	1940内閣情報局 1941太平洋戦争

代		1944	1社の統合合併・『北海道新聞』の誕生 「出版事業令」により北海出版社・北海教育評論社・淳文書院・北方文化出版社が合併統合、北方出版社設立	
		1945	大日本雄弁会講談社、札幌市に支社設置、日本出版会北海道支部設置	1945年8月・終戦
	占領軍によるメディア検閲 (1945・9～1949・10)	1946	<全国的出版ブーム>に伴う北海道出版ブーム(筑摩書房・鎌倉文庫・青磁社・創元社等の本州資本出版社が札幌に支社等を設置・道内新興出版社が設立)、道内での新興新聞、創刊ブーム。	1947日本国憲法発布 1949社会教育法1950図書館法・北海道開発庁設置
		1947	<北海道出版文化祭>(日本出版協会北海道支部主催)、同文化祭記念出版『北海道出版小史』刊行北海道郷土研究会	
		1949		
		1951	新聞用紙・印刷用紙の統制物資指定(配給制)、解除、千歳・東京間の民間航空、就航	1952対日平和条約発効
		1952	民間ラジオ放送開始(HBC)	
		1954	楡書房設立	
	1952年以降、言論・出版の自由確立	1955	みやま書房設立	
		1956	道内テレビ放送開始 <市町村史ブーム>	
1959		朝日・毎日・読売の各新聞の北海道印刷開始		
1968		雑誌『北方文芸』創刊	1968開道百年	
1969		『新北海道史』刊行開始 (第二次出版ブーム)(北書房・北大図書刊行会・北海道出版企画センター・北海道新聞社・北海タイムス社等) <活版印刷から電子化印刷技術へ>		
1973		<北海道書籍出版協会>設立		
	1981	『北海道大百科事典』上・下(北海道新聞社)		
平成時代	同上	1989～現在	北大出版会・北海道出版企画センター・北海道新聞社・中西出版(株)・亜璃西社・寿郎社・共同文化社・響文社・柏鱗舎等が活発な出版活動。	電子ジャーナル、
		2008	『北海道の出版文化史』(北海道出版企画センター)	2009年i-pad

(資料2) 『北海道新聞』(朝刊)連載<名著・労作の周辺>掲載一覧  
(1972(昭和47)年11月～1973(昭和48)年12月連載)

掲載年月日	掲載番号	書名(作者名・著者名)	執筆者
47・11・4	1	アイヌ神謡集(知里幸恵)*岩波文庫	藤本英夫
47・11・11	2	冬の華(中谷宇吉郎)	東 晃
47・11・18	3	乳房喪失(中城ふみ子)*歌集	船橋精盛
47・11・25	4	近世蝦夷人物誌(松浦武四郎)	吉田武三
47・12・2	5	日本文学史の周辺(風巻景次郎)	近藤潤一
47・12・9	6	砂金帯(細谷源二)*句集	川端鱗太
47・12・16	7	零の発見(吉田洋一) *岩波新書・岩波文庫	井手三郎
47・12・24	8	並木凡平歌集(並木凡平)	宮之内一平
47・12・30	9	小熊秀雄評論集	佐藤喜一
48・1・6	10	求安録(内村鑑三)	佐古純一郎
48・1・13	11	北海道自由国論(河野広道)	榎本守恵
48・1・20	12	亜墨利加一条写(小嶋又次郎)	当作守夫
48・1・27	13	蝦夷地は歌ふ(河合裸石)	木原直彦
48・2・3	14	蝦夷切支丹史(ゲルハルト・フーベル)	永田富智
48・2・10	15	雪卍 藻岩嶺(宮田益子)	菱川善夫
48・2・17	16	赤蛙(島木健作)	早川 平
48・2・24	17	管江真澄遊覧記 *東洋文庫	達本外喜治
48・3・3	18	微笑思慕(森みつ子)*詩集	永井 浩
48・3・12	19	日本人の精神史研究(亀井勝一郎)	武田友寿
48・3・19	20	コタンの口笛(石森延男)	笠原 肇
48・3・26	21	空知川の岸边(国木田独歩)	木村真佐幸
48・4・2	22	生れ射づる悩み(有島武郎) *岩波文庫	武井静夫
48・4・9	23	隠り沼(小田観螢)*歌集	永平利夫
48・4・16	24	我が詩篇(川上澄生)	友田多喜雄
48・4・24	25	街と村(伊藤 整)	小笠原 克
48・4・30	26	アイヌ語入門(知里真志保)	沢田誠一
48・5・6	27	林檎園日記(久保 栄)	佐々木逸郎
48・5・13	28	石狩川(本庄陸男)*新潮文庫	山田昭夫
48・5・20	29	底流(山下秀之助)	中山周三
48・5・27	30	氷点(三浦綾子)*朝日文庫	高野斗志美
48・6・3	31	氷河時代の世界(湊 正雄)	橋本誠二
48・6・10	32	挽歌(原田康子)	鳥居省三

48・6・21	33	蟹工船（小林多喜二） *新潮文庫	布野栄一
48・6・24	34	北蝦夷古謡篇（金田一京助）	浅井 亨
48・7・1	35	一握の砂（石川啄木）	昆 豊
48・7・9	36	芥子澤新之介歌集	水口幾代
48・7・15	37	サイロのほとりにて（武田泰淳）	和田謹吾
48・7・22	38	馬追原野（辻村もと子）	木原直彦
48・7・29	39	クラーク先生とその弟子たち （大島正健）	伊藤秀五郎
48・8・5	40	歌集・コタン（違星北斗）	須貝光夫
48・8・12	41	新考北海道史（奥山 亮）	榎本守恵
48・8・19	42	北国物語（船山 馨） *角川文庫	野口富士男
48・8・26	43	海の聖母（吉田一穂） *詩集	鷺巣繁男
48・9・2	44	アイヌ政策史（高倉新一郎）	榎森 進
48・9・9	45	榎本武揚（加茂儀一）	井黒弥太郎
48・9・16	46	石狩少女（森田たま）	山田昭夫
48・9・22	47	種薯（更科源蔵） *詩集	佐々木逸雄
48・9・29	48	炭坑に生きる（三菱美唄炭坑労働組合 編） *岩波新書	森山軍治郎
48・10・7	49	日本風景論（志賀重昂） *岩波文庫	伊藤秀五郎
48・10・13	50	処女地（早川三代治）	小笠原 克
48・10・19	51	開墾の記（坂本直行）	吉田十四雄
48・10・28	52	句集「花樺」（伊藤凍魚）	勝又木風雨
48・11・3	53	英文「武士道」（新渡戸稲造） * 翻訳→岩波文庫	石上玄一郎
48・11・10	54	北海道社会運動史（渡辺惣蔵）	三好宏一
48・11・18	55	百姓記（吉田十四雄）	中紙輝一
48・11・26	56	日本資本主義発達史（野呂栄太郎） * 岩波文庫	富森虔児
48・12・2	57	北方植物の旅（舘脇 操）	伊藤秀五郎
48・12・7	58	密猟者（寒川光太郎） *創作	神谷忠孝
48・12・14	59	行きゆきて峠あり（子母沢寛）	尾崎秀樹
48・12・21	60完	姉妹（畔柳二美）	木原直彦

## 講演会「北海道の出版文化史 昭和時代を中心にして」関連資料展示リスト

2010.9.4 於北海道立図書館研修室

※各資料について、概ね次の順に表記しています

**書名 副書名 巻次 巻書名**

著編者 版次 出版地 出版者 出版年 ページ 大きさ (叢書名 叢書番号) 注記 請求記号

### 幕末

#### 東西蝦夷山川地理取調紀行 20 久摺日誌

松浦武四郎 // 著 [出版地不明] 多気志樓蔵版 [出版年不明] 29, 3 丁 26cm 木版本  
請求記号 : 210.088/TO/20

※貴重資料のため、通常はマイクロフィルムでの閲覧となります。

### 明治期

#### 開拓使公文抄録 明治7年

開拓使編輯課 // 編 札幌 開拓使編輯課 1881 293p 23cm 317/KA/M7

#### 北海道移住問答

北海道第二部殖民課 // 編 札幌区 北海道第二部殖民課 1891 182p 地図 表 19cm  
334.5/H0

#### 殖民公報 18号~23号

[札幌] 北海道庁殖民部拓殖課 1904.1~1904.11

#### 函館区史

函館区 [函館] 函館区 明44.7 817p 図版 地図 22cm 218.6/HA

#### 北海之殖産 8号~18号

札幌区 勤農協会 1891.1~1891.12

#### 函館新聞 1号

函館 北溟社 1878.1.7 M1235 ※マイクロフィルムからの複製 (1面のみ)

#### 札幌農学校

札幌農学校学芸会 // 編 東京 裳華房 1898.9 115p 図版 23cm 377.28/SA

### 大正期

#### 北海道史 第1

北海道庁 // 編 札幌 北海道 1918 958p 22cm 210.1/H0/1

#### 北海道視察便覧 大正3年

北海道 // 編 札幌 北海道 1914 図版 1冊 19cm 291/H0/T3

#### 北海道移住手引草 第16

北海道拓殖部 // 編 札幌 北海道拓殖部 1915 20cm 334.5/H0/16

#### 開墾及耕作の業 大正7年

北海道拓殖部 // 編 札幌 北海道拓殖部 1918 97p 図版 19cm 334.5/H0/T7

#### 宗谷支庁管内概況

北海道宗谷支庁 // 編 稚内 北海道宗谷支庁 1918 130p 19cm Y351.11/H0

#### [下湧別] 村勢要覧 大正5年

下湧別村 // 編 下湧別村 (網走) 下湧別村 1916 24p 15cm Y351.153/SH/T5

#### 村勢一斑 1922

琴似村 // 編 琴似村 (石狩) 琴似村 1922 1枚 38×64cm (折りたたみ) Y351.561/K0/T11



## 北海道地名解

磯部精一 // 著 東京 富貴堂 1918 168p 19cm 291.034/I

## アイヌの炉辺物語

ジョン・パチェラー // 著 河合裸石 // 訳 再版 札幌 富貴堂書房 1925 85p 19cm 7.92/B

## 昭和期

### ■ 戦前

#### 北海道小学郷土読本 巻1

北海道小学校長会 // 編 札幌 日本教育出版社 1932 94p 22cm 北海道庁推奨 375.3/HO/1

#### 新撰北海道史 第3巻

北海道庁 // 編 札幌 北海道 1937 886p 24cm 210.1/HO/3

#### 北海タイムス年鑑 昭和14年度版

北海タイムス社 // 編 札幌 北海タイムス社 1938 679p 19cm 059/HO/S14

#### 北海道樺太年鑑 昭和9年版

小樽新聞株式会社 // 編 小樽 小樽新聞 1934 608p 19cm 059/HO/S9

#### 北海道文化史考

日本放送協会札幌中央放送局 // 編 札幌 日本放送出版協会 1942 338p 22cm 210.04/NI

#### 北海道文化史序説

高倉新一郎 // 著 札幌 北方出版社 1942 130p 19cm (北方叢書 第2輯) 210.1/TA/

#### 女子青年読本 雪之巻

北海出版社編集部 // 編 札幌 北海出版社 1929 7版 144p 19cm 375.9/J

#### 北邦教育叢書 第1輯

北邦教育協会 // 編 札幌 北海教育評論社 1933 119p 19cm 共同刊行：北邦教育協会 370.4/HO

#### 北海道農業青年栽培宝典

北海道農業教育研究会 // 編 札幌 淳文書院 1938 368p 19cm 再版 610.3/HO

#### 北方農業の肥料

天野文助, 今野 順治郎 // 共著 札幌 北方文化出版社 1944.12 197p 21cm 613.4/A

#### 北方農業講義 第11巻

北方農業社 // 編 札幌 北方農業社 1940 217p 22cm 099/Y/678

### ■ 戦後

#### ①占領期 北海道出版ブーム

##### 《道内資本》

##### 北の先覚

高倉新一郎 // 著 札幌 北日本社 1947.11 276p 19cm 097/SH/38

##### 北方動物記

更科源蔵 // 著 札幌 柏葉書院 1946 113p 19cm (北農文化叢書) 480.4/SA

##### 冬ごもり日記

関矢マリ子 // 著 札幌 柏葉書院 1946 81p 19cm (北農文化叢書) 289/SE

##### 《本州資本》

##### 北海道の開拓と開拓者

高倉新一郎 // 著 札幌 札幌講談社 1947 147p 18cm (北海道農業新書) 097/SH/207

##### 小説日本婦道記

山本周五郎 // 著 札幌 大日本雄弁会講談社 1946 232p 15cm 097/SH/463

##### 来訪者

永井荷風 // 著 再版 東京 筑摩書房 1947 377p 21cm 097/SH/453

## 《児童書》

### エルム社の絵本よみもの この努力この栄冠

塚本長蔵//文 梁川剛一//画 札幌 エルム社 1947. 4 [22p] J913.8/TS

### エルム社の絵本よみもの 不屈魂

塚本長蔵//文 梁川剛一//画 札幌 エルム社 1946 1冊 26cm J913.8/TS

### くわんさつ・じっけん植物十二ヶ月

原田三夫//著 札幌 子供の国 1946 87p 19cm 097/SH/135

## ②昭和30年代 商業出版の隆盛

### 北海道こども風土記

北海タイムス文化部//編 札幌 楡書房 1955 112p 22cm 執筆：富樫曾太郎 J384.5/TO

### アイヌ語入門 とくに地名研究者のために

知里真志保//著 東京 楡書房 1956 276p 図版 18cm (これ双書 第1) 7.8/C

### 北海道事始め

NHK札幌中央放送局//編 札幌 楡書房 1956 227p 19cm 210.04/NI

### わたしたちの札幌 社会科副読本

札幌市小学校社会科研究部//編 札幌 北海教育評論社 1957 44p 21cm 375.91/W

### 黒田清隆 埋れたる明治の礎石

井黒弥太郎//著 札幌 みやま書房 1965 213p 図版 21cm 289/KU

### 北海道の産業

蝦名賢造//著 蒲田順一//著 杉本静枝//著 札幌 みやま書房 1957 216p 地図 22cm 602.1/E

### 札幌のおいたち

井黒弥太郎//著 新修版 札幌 みやま書房 1966 112p 18×18cm 375.91/I

### 北海道の女 異色ルポ女あんない

更科源蔵//等著 札幌 北書房 1963 204p 18cm 914.6/H0

### アイヌ民話集

更科源蔵//著 札幌 北書房 1963 206p 18cm 7.92/SA

### 本庄陸男遺稿集

本庄陸男遺稿集刊行会//編 札幌 北書房 1964 296p 図版 19cm 918.6/H0

## ③昭和40年代～現在 多種多様な商業出版

### 北前船考

越崎宗一//著 新版 札幌 北海道出版企画センター 1972 268p 図 19cm 683.2/K0

### ウォッチング札幌 地図に映る150万都市

札幌地理サークル//編 [札幌] 北海タイムス社 1987. 1 127p 26cm 発売：タイムスサービズ 291.561/SA

### 札幌農学校

札幌農学校学芸会//編 高倉新一郎//解題 札幌 北海道大学図書刊行会 1975 115, 22p 図版 22cm 覆刻 377.28/SA

### 札幌農学校

札幌農学校学芸会//編纂 札幌 北海道大学図書刊行会 2005. 6 115, 22p 図版14枚 23cm 解題：高倉新一郎 付：図(3枚) 377.28/SA

### アイヌ衰亡史

奥山亮//著 札幌 みやま書房 1966 242p 19cm (みやま双書) 7.2/0

### アイヌ絵志

越崎宗一//著 札幌 北海道出版企画センター 1972 99p 図124枚 8p 19cm 再版(初版：昭和34) 7.7/K0

北方文芸 1巻1号 札幌 北方文芸社 1968.1  
財界さっぽろ 4巻1号 札幌 さっぽろ百点 1966.1  
ダン 1巻1号 札幌 北海道新聞社 1973.8  
クオリティ 1巻1号 札幌 北海道財界研究所 1966.12  
読書北海道縮刷版 1977-1989 札幌 北海道読書新聞社 1995  
北海道大百科事典 上  
北海道新聞社 // 編集 札幌 北海道新聞社 1981 1145p 図版 64p 27cm 031/H0/1  
月刊アイワード 合本 合本 10巻 (271~300号) 札幌 アイワード 1994

## 北海道の出版史

### 北海道の出版文化史 幕末から昭和まで

北海道の出版文化史編集委員会 // 編 札幌 北海道出版企画センター 2008. 11 762p 図版  
12p 22cm 023/H0

### 北海道出版小史

高倉新一郎 // 著 札幌 日本出版協会北海道支部 1947 64p 19cm 023/TA

### 函館出版小史 明治大正編

近江幸雄 // 著 はこだてまいくろぶっく 1978 71p 図版 19cm 023/H0

## 講師・出村文理氏著作 出版関係を中心に

### 戦後北海道刊行書籍に関する覚書 いわゆる札幌版の存在について

出村文理 // 著 札幌 北の文庫の会 1994 p10~16 26cm 『北の文庫』23号別刷 023/D

### 戦後占領期・札幌及び北海道刊行の書籍・雑誌に関する文献目録

出村文理 // 著 札幌 北の文庫の会 1995. 12 18p 26cm 『北の文庫』24号 023/SE

### 戦後占領期・札幌市の出版ブームについて

出村文理 // 著 [札幌] [出村文理] 1996 1冊 23cm 『札幌の歴史』30号抜刷 023/SE

### 覚書・昭和22年開催の北海道出版文化祭 戦後占領期北海道出版ブーム下の読書週間

出村文理 // [著] 札幌 北の文庫の会 1998. 7 11p 27cm 『北の文庫』26号 023/0

### 出版編集者・池田秀男と鶴（ぐるす）文庫 戦後札幌で刊行のお洒落で上品な出版物

出村文理 // 著 札幌 札幌市民芸術祭実行委員会 1998. 12 p51~59 21cm 『さっぽろ市民  
文芸』15号別刷 023/SH

### 思いがけないルネサンス（文芸復興） 戦後北海道出版事情

市立小樽文学館 // 編 小樽 市立小樽文学館 1999. 2 48p 21cm 023/0

「戦後北海道の出版事情」（出村文理著）所収

### 占領期の出版事情・出版物（未定稿）

出村文理 // 著 東京 文献探索研究会 2001. 2 p380~383 26cm 『文献探索 2000』別刷  
023/SE

### 占領下日本の〈検閲〉考 子ども、出版、文化 「占領下のこども文化〈1945~1949〉展」北海道展

札幌 北海道文学館 2001. 10 20p 26cm 023/SE

「占領期北海道刊行の雑誌 百花繚乱の創刊」（出村文理著）所収

### 北海道の出版文化史 幕末から昭和まで

北海道の出版文化史編集委員会 // 編 札幌 北海道出版企画センター 2008. 11 762p 図版  
12p 22cm 023/H0

「昭和戦前期の出版事情」（出村文理著）ほか所収

### 知里幸恵書誌

知里森舎 // 編 登別 知里森舎 2004. 6 150p 26cm 7.02/C

<展示リスト作成：北海道立図書館北方資料室>

---

講演会・資料で語る北海道の歴史 講演録  
「北海道の出版文化史 ～昭和時代を中心にして～」  
(北の資料 第128号)

発行日 平成25年3月31日

編集 北海道立図書館北方資料室

発行 北海道立図書館

〒069-0834 江別市文京台東町41番地

電話 (011) 386-8521

FAX (011) 386-6906

<http://www.library.pref.hokkaido.jp/>

---